協同学習が学習適応に及ぼす効果

○沖林洋平[1]・藤木大介[2]・石井眞治[3]
([1]山口大学教育学部・[2]愛知教育大学・[3]比治山大学)

問　題

本研究の目的は実践的学びを省察する「発見ノート」の評価場面における活用に対する基礎資料を提供することにある。とりわけ，学生の省察過程を的確に把握することができる観点を見つけ出すことを目指す。

教育や看護等の専門職を育成する課程が増えるにあたり，教育実習や看護実習，インターン，チューターやメンタリングなどの実践活動をどのように評価するかについての議論に対する必要性が高まっている。なぜなら，従来の講義型の授業においては，授業者が授業において受講生に提供した情報についての受講生の理解度を測定することで授業の質については保証されていたのに対し，講義以外の活動が増える授業科目においては，むしろ講義時間外に受講生それぞれが経験した固有の学びを評価する必要があるからである。

ここで求められるのは，学生の実践的活動から教育評価につながる情報をできるだけ多く抽出することができる学習ツールの開発であるだろう(永田・森山・森広・掛川，2009)。とりわけ，教員養成や教員研修における，学習者の経験のポートフォリオ作成ならびに学生の実践活動のリフレクションの効果検証に関する研究は，現在多くのプロジェクトによって進められており，それぞれに独自性があるといえる。例えば，元木(2009)では，学習における「メタ認知ストラテジー」に注目し，学生が自律的に学習を進めるための学習の各ステップにそれぞれの学習成果についての自己評価を行うプロセスを組み込んだ e-Learning システムを開発し，大学1年生のドイツ語学習における効果を検討している。その結果，自己評価を導入した学習者の学習モデルは「行動目標の明確化」から「課題の遂行」，そして「自己評価」に至る学習循環モデルを形成することを見出した。

方　法

実施時期　2010年4月から2011年2月まで

研究協力者　山口大学教育学部小学校教育コースの30名が協力者であった。

手続き　本研究の調査対象授業は，1年時に実質通年で開講される小学校コースの必修科目であった。授業内容としては，土日に行われる学外への地域教育活動や外部講師を招いてのシンポジウムなどへの参画活動と，発見ノートの記述をグループで共有しディスカッションをする活動という，実践的学びと省察的学びの2側面により構成されていた。

材料　本研究では，山口大学教育学部小学校教育コースで用いられている「発見ノート」を材料とした。

結　果

自由記述で得られたすべての記述の単語出現頻度をTable1に示す。名詞としては，「子ども」「自分」「授業」という語が多く得られた。形容詞は「楽しい」「よい」「難しい」という語が多く得られた。動詞は「思う」「する」「できる」という語が多く得られた。

考　察

学生の実践的活動については1年間の省察活動は不可欠であることである。学生が主体となって講義時間外に学びの機会を持つ場合，その経験を記述することができるのは本人だけである。本研究では，学生による省察活動が，学生の経験の記録だけでなく，第三者による評価活動にも有効である可能性が示唆されたといえる。本研究の取り組みは，学生が自発的に発見ノートに記述することを前提としている。すなわち，そのような学生の自発性を1年間維持し続けるような実践プログラムを開発することが必要となる。

Table1　名詞句，形容詞句，動詞句の出現頻度数

名詞句		形容詞句		動詞句	
語句	頻度	語句	頻度	語句	頻度
子ども	72	楽しい	25	思う	97
自分	64	よい	24	する	75
授業	44	難しい	23	できる	68
子	35	多い	23	なる	62
先生	34	すごい	22	ある	45
人	32	大切だ	18	考える	29
話	22	ない	17	感じる	28
活動	20	大事だ	13	分かる	21
意見	20	いい	13	違う	20
みんな	18	良い	12	学ぶ	19